

Petronellaにおける女性ヒーローと男性表象

谷口, 秀子
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4377787>

出版情報 : 言語科学. 56, pp.63-71, 2021-03-23. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

Petronella における女性ヒーローと男性表象

谷口秀子

1. はじめに

よく知られている西洋のおとぎ話の多くは、17世紀頃の厳格な家父長制の時代に成立したものであり、その時代の男性中心的な価値観やジェンダー構造を色濃く反映している。たとえば、シャルル・ペローの『シンデレラ (サンドリヨン)』(Charles Perrault, *Cendrillon*) (1697)¹ は、口承のシンデレラの物語を、当時の家父長制的な価値観と女性観にもとづいて書き直し、作品にしたものである。そのため、シンデレラや白雪姫に代表される西洋の因習的なおとぎ話のヒロインは、美しく、従順で気立てが良く忍耐強くはあるが、主体性と行動力に欠け、自分自身を苦境や窮地から救い出す意思も能力を持ち合わせてはいない。そして、このような、いわば前時代的なおとぎ話のプリンセス像は、現代においても、たとえば、ディズニーの絵本やアニメ作品などで再生産され続けている。²

児童文学作家の Jacqueline Wilson は、勇敢な女性像を含む世界の民話を収録した *Ladybird Tales of Adventurous Girls* (2018) の “Introduction” の中で、子どものときに感じた伝統的なおとぎ話のヒロインに対する強い不満を以下のように述べている。

When I was a little girl I loved reading fairy stories, especially if they were about beautiful princesses with long curly hair who wore frilly dresses down to their satin slippers. But after a while I got a bit tired of all these princesses. They seemed a rather silly bunch, for all their beauty. They let themselves be outwitted by bad fairies and wicked stepmothers, and were rendered helpless by pricking their fingers or eating poisoned apples. They then fell into a deep sleep and languished for years until a handsome prince just happened to come along and rescue them.

Why couldn't they rescue themselves? I wanted them to outwit the baddies in the books. It would be wonderful if they were clever and courageous and prepared to go on amazing adventures. (Wilson 2018, p. 6)

Wilson も指摘しているように、因習的なおとぎ話のヒロインに欠けているのは、おとぎ話の男性主人公には当然のように備わっている主体性と行動力、賢さと勇気、自分で苦境を脱する意思と力であり、自らの資質と能力を発揮することのできる場であり冒険の機会である。

家父長制的な価値観にもとづく因習的なおとぎ話に異議を唱え、そこにみられるジェンダー構

造と因習的な女性像を転覆させることを目的に創作されたのが、フェミニズム童話 (feminist fairy tales) というジャンルに属する作品群である。フェミニズム童話とは、1960年代と1970年代を中心とする第二波フェミニズム運動の影響を受けて、1970年代から1980年代頃を最盛期として、主に欧米で発表された創作おとぎ話のジャンルを指す。³ フェミニズム童話は、女性だけでなく男性の作家によっても執筆され、作品によってフェミニズム的なテーマへのアプローチは異なるものの、概して、西洋の多くの伝統的なおとぎ話に見られる家父長制的で男性中心的なジェンダー体制とそれに見合うように作り上げられた不活発で主体性に欠ける因習的な女性像のステレオタイプを転覆させようとする点に、大きな特徴があり、多くの主体的で賢く勇敢で思いやりのあるヒロインを生み出し、彼女たちを冒険などの物語の中心的な行為者として描き出した。

1973年にJay Williamsによって発表された *Petronella*⁴ は、そのようなフェミニズム童話の代表的な作品である。*Petronella* は、Jack Zipesによる *Don't Bet on the Prince: Contemporary Feminist Fairy Tales in North America and England* (1986) をはじめとする、複数のフェミニズム童話のアンソロジーに収録されており、加えて、*The Oxford Book of Modern Fairy Tales* (1993) においては、“fairy tales with a strong feminist slant” (Lurie 1993, p. xviii) のひとつとして紹介されている。

本論文では、*Petronella* におけるヒロイン像とヒロインを取り巻く男性登場人物の表象を分析し、本作品におけるヒロインのフェミニズム性とヒーロー的なヒロインを描く作品における「男性性」の扱いを考察する。そして、フェミニズム童話というジャンルにおける *Petronella* の作品としての特徴を明らかにする。

2. 女性ヒーローとしてのヒロイン像

フェミニズム童話は、ヒロインを因習的なジェンダーから解き放ち、過酷な冒険や困難に立ち向かう賢く勇敢なヒロインを多数生み出してきたが、*Petronella* もそのようなヒーロー的なヒロインのひとりである。*Petronella* は、歴代の国王夫妻に常に3人の息子が生まれ、成長して運試しの旅に出る3人の王子のうち、Peter という名の3番目の王子だけが、その旅において囚われの身のプリンセスを救出して国に戻り、国を治めるのが習わしである王国の長い歴史の中で、初めて、3番目の子どもとして生まれた女の子である *Petronella* を主人公とする冒険物語である。成長した *Petronella* は、代々第3王子が担ってきた役割を果たそうと、自らの強い意志で、兄たちと共に冒険の旅に出る。そして、*Petronella* は、持ち前の資質と能力を発揮して、魔法使いに与えられた命がけの任務を成し遂げ、最終的に、自分にふさわしい結婚相手の獲得に至る。

Petronella において、因習的なおとぎ話のステレオタイプ的なプリンセス像は、*Petronella* の存在とその言動によって一掃されている。*Petronella* が兄たちと同様に旅に出ると宣言するとき発する、“If you think that I'm going to sit at home, you are mistaken. I'm going to seek my

fortune, too.” (p. 55) という言葉は、自らは何も行動せずただ待つばかりのおとぎ話のプリンセスと Petronella との大きな違いを示している。一方、因習的な性別役割を逸脱するような Petronella の主張に対する家族の反応は、因習的なジェンダー観を反映したものである。国王は “Impossible!” (p. 55) と言い放ち、王妃は “What will people say?” (p. 55) と世間の反応を心配する。また、長兄の Michael は “Look, be reasonable, Pet. Stay home. Sooner or later a prince will turn up here.” (p. 55) と述べ、プリンセスは王子が現われて自分に求婚するのをじっと待つものであるという、おとぎ話によく見られる主体性がなく受け身的なプリンセス像のあり方をなぞってみせる。

Petronella は、このような因習的な女性観を一顧だにせず、王家の3番目の子どもとして、これまで3番目の王子が代々果たしてきた囚われの身にある高貴な異性を救い出して結婚し王国を継承するという大義を果たすことを目指そうとする。Petronella が果たそうとしている将来の結婚相手の発見と救出は、因習的なおとぎ話では、もっぱら「男性的な」役割とされるものであるが、Petronella は、性別に関わりなく、冒険的な行為の遂行者として、王子を救い出す能動的な役割を演じることを強く望む。さらに、作者は、作品の語り手に、この場面の Petronella を “a tall, handsome girl with flaming red hair” (p. 55) と描写させることにより、因習的なおとぎ話のプリンセスの「女性性」溢れる美しさとは一線を画した Petronella の強さを兼ね備えた美しさを示し、⁵ 彼女が冒険の旅に出るのにふさわしい芯の強さを持っていることを暗示している。ここで、作者は、女性である Petronella に危険を伴う冒険や他者の救出という、おとぎ話ではほぼ男性に限られる行為を自ら選び取らせることによって、ジェンダーの制約にとらわれることなく自身の能力と特質を披露する場を Petronella に提供しているのである。第二波フェミニズム運動におけるリベラル・フェミニズムの目標のひとつは、男性が独占している分野への女性の参入であったが、まさに、Petronella は、男性だけに限られる冒険の機会への参加を要求しているのであり、その上で、冒険で成果を上げる能力が自分にもあることを証明しようとしているのである。

因習的には男性の役割とされてきた冒険に挑む Petronella は、持ち前の資質と能力を発揮して、困難を乗り越え成果を得る。旅の始めに、3人の兄妹がその後別々の道をたどることになる3道の道の分岐点に長年座らされている老人と出会う場面では、Petronella が、老人の境遇に心を痛め、“Is there anything I can do to help you?” (p. 56) という思いやりのある言葉をかけた途端、老人は呪いから解放され自由の身となる。Petronella は、老人を呪いから解放したことに対する報償として、囚われの身の王子を救出しに向かうべき場所が魔法使い Albion (Albion the Enchanter) の館であることと、Albion のもとで働いて3つの魔法の道具 (櫛、鏡、指輪) を手に入れれば、王子の救出の際に役に立つことを、老人から教えられる。このように、Petronella が示す弱者に対する優しさや思いやりという特質は、賢さや勇敢さや意思の強さと並んで、Petronella が危険な冒険を遂行し困難を克服するための力となる。また、Petronella の優しさは、

物語の後半で、彼女が、王子を連れて Albion の館から馬で逃げる際に、魔法を使ってすさまじい勢いで追ってくる Albion を魔法の指輪で縛り上げることに成功するものの、Albion をそのまま放置すれば彼が飢え死にってしまうのを心配して、王子を解放すると約束すれば、身体を締め付けている輪をはずしてやると、Albion に告げる場面にも表われている。

Albion の館に入った Petronella は、王子を救い出すための3つの魔法の道具を手に入れるため、Albion に彼のもとで働かせて欲しいと頼む。Petronella の3回の頼みに応じて Albion から与えられる3つの任務は、それぞれ、極めて獰猛な、7匹の犬、7頭の馬、7羽の鷹を一晩中ひとり世話することであり、成功すれば褒美がもらえるが、失敗すれば獰猛な動物に命を奪われる危険なものである。Petronella は、国家的な大義を果たすために勇気をもって試練に立ち向かい、賢さと機知に富んだ判断力で、獰猛な犬・馬・鷹それぞれに適切に対処し、命に関わる危険な任務を無事に果たす。Petronella は、最初の任務では勇敢さを、ふたつ目の任務では優しさを、3つ目の任務では歌の才能を、Albion に高く評価され、その褒美として3つの魔法の道具を手に入れることに成功する。

Petronella は、因習的な「女性らしさ」ととらわれない、行動力溢れるヒーロー的なプリンセスである。ただし、Petronella の属性である勇気と賢さと意思の強さは、因習的に「男性的な」特質とされるものであり、優しさは、因習的に「女性性」と関連付けられるものであることは特筆すべきことである。つまり、Petronella は、因習的に「男性的」とされる優れた特質だけではなく、因習的に「女性的」とされる優れた特質をも兼ね備えた「両性具有的な」女性ヒーローである。また、このことは、「女性性」と関連付けられる優しさなどの特性が、勇気や賢さと同様、苦難を乗り越える際の大きな力になることを示しており、第二波フェミニズムやフェミニズム童話において重要視された「女性的な」価値観の尊重という理念にも合致している。

3. *Petronella*における男性表象

Petronella においては、Petronella の父である国王、ふたりの兄、路傍の老人、「囚われの身の」王子、魔法使い Albion という、6人の男性が登場し、Petronella と男性登場人物との関わり方が、この作品における重要な要素のひとつとなっている。一方、女性登場人物は、主人公の Petronella 以外は母である王妃のみであり、Petronella と王妃の関わりは、詳しく描かれない。また、フェミニズム童話に多々見られる女性同士の連帯 (sisterhood) も一切登場しない。このように、*Petronella* は、女性同士の関係性ではなく、ヒロインと「男性性」および男性登場人物との関係性に重きを置いた作品であるといえる。フェミニズム童話の関心のひとつは、男性中心のおとぎ話の解体であるが、ジェンダーにとらわれない力強いヒロインを描く *Petronella* という作品において、「男性性」や男性の表象は、どのように再構築されているのであろうか。

因習的なおとぎ話に潜む家父長制的な男性中心主義を告発するフェミニズム童話においては、

因習的なジェンダー体制の象徴として、強権的で支配的な国王が描かれることが珍しくなく、物語の帰結として、そのような国王の排除や体制の転覆がはかられることが少なくない。しかしながら、*Petronella* においては、家の存続や利益のために娘の意向を無視して結婚を命じたり、因習的な女性観にもとづいて娘の言動を厳しく制限したりする家父長制の象徴のような国王は登場しない。作品中、国王が言葉を発するのは2カ所のみであり、そのうちのひとつは、王家の代々の習わしに反して3番目の子として女の子が生まれたことを知ったときの、“Well, we can’t call her Peter. We’ll have to call her Petronella. And what’s to be done about it, I’m sure I don’t know.” (p. 55) という当惑の言葉であるが、ここにも、支配的で威厳のある家父長としての父親像は見られない。もうひとつは、上で引用した、*Petronella* が冒険の旅に出たいと言うときの国王の反応であり、王は、*Petronella* の主張に対して、因習的な女性観にもとづき、“Impossible!” とは言うものの、彼女の強い決意を覆すことはできない。国王は、支配的で強権的な家父長的な父親としては描かれておらず、むしろ、因習的なプリンセス像から逸脱し自由に自己主張する *Petronella* に対して、命令はおろか反論らしい反論も行わず、結局は、娘の希望通り娘を旅に送り出す父親として描かれている。このように、*Petronella* には、家父長制的なジェンダー構造の象徴としての支配的な国王・父親が存在せず、それゆえ、この作品においては、女性を抑圧する強固なジェンダー構造や男性中心主義の存在がほとんどとっていいほど意識されないのである。

Petronella の長兄である Michael も、*Petronella* の冒険の意思の表明に対して、上で引用したような、因習的なジェンダー観にもとづく否定的な意見を一度は述べるが、結局、ふたりの兄は、*Petronella* を旅から排除することはない。父王同様、兄たちもまた、因習的な女性観から自由ではないものの、実際には、*Petronella* を排除したり抑圧したりすることはなく、因習的なおとぎ話における父権的で強権的な男性登場人物とはほど遠い男性像として描かれている。

魔法使い Albion の館に「囚われている」王子である Prince Ferdinand of Firebright は、この作品において、唯一、読者の軽い笑いの対象となりうる登場人物である。フェミニズム童話の特徴のひとつとして、パロディの多用があるが、パロディが多用されるのは、既存のジェンダー構造やジェンダー表象をパロディ化することにより、問題点を浮かび上がらせ、構造の転覆をはかるのに効果的だからである。*Petronella* は、このようなフェミニズム童話的なパロディの要素があまり見られない作品ではあるが、ハンサムな容貌が強調されるこの王子の描き方に関しては、シンデレラなどの、苦境にあっても何も行動を起こさず、他者の助けを待つばかりの美しいヒロイン像のパロディであると考えられる。*Petronella* が、王子を救い出すのに役に立つ魔法の道具を手に入れるために、失敗すれば命を失う過酷な任務に取り組んでいるときにも、当の王子は、脱出するための行動を起こすこともなく、クロスワードパズルなどをしながら日々を過ごしている。(*Petronella* は、王子の当事者意識のなさに対して、“I am doing this for you.” (p. 58) と、不満を表明する。) このような王子の描写は、素敵な王子が助けに来るのをじっと待っているおと

ぎ話の美しいヒロインの性別を男性に置き換えることによって生じる不自然さや滑稽さを読者に感じさせ、「女らしさ」と「男らしさ」やジェンダーの非対称性の問題をあぶり出すのに効果的である。⁶

主人公である *Petronella* に次いで重要な登場人物である魔法使い *Albion* は、*Petronella* の結婚相手となるべき王子を拘束している悪役的な人物として作品に登場するが、*Albion* に関して、邪悪さや愚かさや欲深さなどの否定的な側面が描かれることはない。むしろ、作者は、*Albion* の館が “a comfortable-looking house” (p. 57) であり、館の周りの木々には果実がたわわに実っており、*Petronella* に食事を振る舞うキッチンは居心地が良いこと、そして、*Albion* が初対面の *Petronella* に対して礼儀正しく敬意を込めて接することを描き出すことによって、*Albion* の人柄が肯定的に評価できるものであることを暗示している。

王子を救い出すための3つの魔法の道具を手に入れる目的で、ここで働かせて欲しいと3回にわたって申し出る *Petronella* に対して、*Albion* が与える3つの過酷な任務は、結果的に、他者を救い出す冒険物語の主人公としての *Petronella* に、賢さに加えて勇敢さと優しさと才能という優れた特質を発揮させる場となる。*Albion* は、*Petronella* が任務を果たすたびに、彼女の勇氣や優しきや歌の才能を賞賛し、彼女に褒美を与える。このように、*Albion* は、淑やかで受動的なおとぎ話のプリンセス像から大きく逸脱した *Petronella* の真価を正当に評価し、物語の結末では、“You are just the girl I’ve been looking for. You are brave and kind and talented and beautiful as well.” (p. 60) と述べて、*Petronella* に求婚する。*Albion* は、ヒロインの美しい外見を一目見ただけで彼女に求婚する因習的なおとぎ話の多くの男性求婚者とは異なり、3つの過酷で困難な任務において見極めた *Petronella* の優れた特質を評価して彼女に結婚を申し込むのであり、*Albion* のジェンダーにとらわれない女性観がここに明らかになる。また、同時に、家父長制的な価値観とは相容れない、強い意思を持ち賢く勇敢に行動する *Petronella* の特質は、男性である *Albion* によって高く評価されることによって、その評価が確固たるものになるという側面もある。すなわち、(価値基準となる人物が男性であり、その形が求婚であることは別として、) *Albion* は、*Petronella* の優れた資質と能力の質を保証する一種の評価基準としての役割も果たしているといえる。

さらに、*Albion* の他者への思いやりも、彼の特筆すべき特質である。実は、王子は、*Albion* に囚われていたのではなく、自ら館に居座って一向に帰ろうせず、*Albion* を困らせていたのであるが、*Albion* は、礼節を重んじて相手を慮るあまり、王子を館から追い出すことができずにいたのである。“I didn’t like to be rude to a guest and I couldn’t just kick him out.” (p. 60) このような他者を慮る気持ちや他者への敬意は、彼が初めて *Petronella* に会ったときの態度にも表わされており、王子の示す身勝手な横柄な態度とは対照的である。また、*Albion* におけるような他者を思いやる姿勢は、*Petronella* における他の男性登場人物の中には見るできない。*Petronella*

のふたりの兄は、Petronella が道端に座っている老人の境遇に心を痛める場面において、老人に対する思いやりや憐れみの感情を抱くことも老人を気遣う言葉をかけることもない。「囚われの身の」王子についても、Petronella と王子を追いかけてきた Albion が魔法の指輪に身体を縛り上げられる場面で、Petronella が、Albion をこのまま放置すれば餓死してしまうと心配するときも、王子は、“that’s the end of him.” (p. 60) と冷淡な反応を示すのみである。Albion は、おとぎ話的な物語の展開上、Petronella に過酷な任務を与える役目を負わされているが、Petronella の兄たちや「囚われの身の」王子とは異なり、他者の気持ちを思いやることのできる男性登場人物であり、Petronella 同様、因習的に「男性的な」特質とされる強さや賢さと、因習的に「女性的な」特質とされる思いやりを兼ね備えた「両性具有的な」登場人物であるといえる。

4. おわりに

フェミニズム童話のジャンルに属する作品の創作において、家父長制的なジェンダー構造の転覆と、因習的な女性像からのヒロインの解放、女性の価値観の尊重などの、第二波フェミニズム的な理念を作品において実現するための多くの実験的な手法が用いられてきた。その手法の中には、女性や女性登場人物の能力の高さや優位性を強調するため、あるいは、男性中心の社会構造や男女のジェンダーの非対称性を可視化させるためなどの理由で、あえて、男性登場人物を過度に矮小化したりカリカチュアライズして描いたり、「男性性」や「男性的な」価値観を貶めたり否定したりするような試みも含まれる。⁷

Petronella は、フェミニズム童話のジャンルに分類される作品ではあるが、この作品においては、男性の矮小化やカリカチュアライズは行われず、女性を抑圧する家父長制を象徴する父親も、ヒロインの活躍の邪魔をする悪徳で愚かな男性の敵役も登場しない。つまり、*Petronella* の作者は、既存のジェンダー構造の理不尽さを鋭く告発する手法を用いるのではなく、女性の言動を制限し女性を抑圧するような強固なジェンダー構造が意識されない場をヒロインに提供することによって、現代におけるロールモデルとなりうるヒーロー的なヒロイン像を構築することに重きを置いているように思われる。そのため、*Petronella* に登場する男性登場人物には、「女らしさ」、「男らしさ」などのジェンダー・ステレオタイプへの強いこだわりや性差別的な言動が見られず、むしろ、因習的な女性像にとらわれず、*Petronella* の勇敢さや賢さを高く評価できる Albion のような男性登場人物の存在が大きいものとなっている。

このように、*Petronella* においては、ある種のフェミニズム童話に見られる女性と男性の分断や対立関係は見られず、*Petronella* と Albion の関係には、男女の相互理解と協調と融和が見られる。フェミニズム童話の中には、女性を抑圧する家父長制を助長するとして、結婚のテーマを回避したり結婚を否定的に描いたりする作品も少なからず存在する。⁸ しかしながら、*Petronella* における *Petronella* と Albion との結婚は、因習的なおとぎ話における家父長制のシステムの一

部としての、女性を抑圧する制度としての結婚とは性格を異にする。Petronella と Albion の結婚は、因習的なおとぎ話におけるような厳格な家父長である父が娘に強いる結婚でも、突然王子が現われてヒロインに一方向的に求婚する結婚でもない。Petronella は、自身が行った冒険の報償として、Albion を夫として獲得するのであり、傲慢で自己中心的な王子ではなく、自分のありのままの姿を理解し高く評価する Albion との結婚を、自らの意思で選び取るのである。⁹ 王子を連れて逃げる Petronella と追いかける Albion の壮絶な競り合いは、結果的には Petronella が Albion を魔法の指輪で捕らえることで決着するものの、両者は互角で対等であり、賢さや優しさや「両性具有的な」側面など、ふたりはパラレルな関係として描かれている。作者は、Petronella と Albion の結婚を通して、ジェンダーにとらわれない男女の対等な関係性と女性と男性の相互理解にもとづく融和と協調の可能性を提示しているといえるであろう。¹⁰

注

* 本稿は JSPS 科研費 17K02504、20K00416 の助成を受けた研究成果の一部である。

1. シャルル・ペローによる『シンデレラ』をはじめとする、現在でも人気のある西洋のおとぎ話は、チャップブックという子ども向けの冊子によって広く英語圏に普及した。おとぎ話とチャップブックについては、谷口 (2017) を参照のこと。
2. ディズニーアニメの『シンデレラ』(1950) もペロー版の『シンデレラ』に多く依拠している。ただし、近年は、ディズニー自身によって、因習的なおとぎ話をジェンダーの視点から語り直した作品が多く発表されている。実写版の *Cinderella* (2015) はその一例である。
3. フェミニズム童話的な物語は、プロの作家が本や絵本の形で出版するだけでなく、一般の人々が Kindle などのデジタル媒体で作品を発表したり、SNS で発信するなど、現在でも創作され続けている。
4. 本論文では、*Petronella* のテキストとして、以下の版を用い、論文中に記載する作品のページ数はこの版によるものとする。Jay Williams, “Petronella”, Jack Zipes (ed.), *Don't Bet on the Prince: Contemporary Feminist Fairy Tales in North America and England*, 2012.
5. “handsome”という言葉が女性に用いる場合のニュアンスについては、以下を参照。“A handsome woman is attractive in a strong way.” (*Cambridge Dictionary*)
6. もっとも、物語の結末で、実は、この王子は、Albion に囚われていたのではなく、Albion の館の居心地があまりにも良いために長い間居座り続けて一向に帰ろうとせず、Albion を大変困らせていたという事実が明らかとなる。
7. フェミニズム童話の矮小化された男性表象については、谷口 (2000)、谷口 (2017) を参照。
8. そのような作品の例としては、Diana Coles, *The Clever Princess* (1983) や Babette Cole,

- Princess Smartypants* (1986) などがある。
9. Petronella が Albion の館から「囚われの身の」王子を連れ出すことは、見方を変えれば、Petronella が、Albion を苦しめる王子から Albion を救い出すことであり、加えて、魔法の指輪に縛られた Albion を救い出すのも Petronella であることから、Petronella が将来の結婚相手を救い出すという国家的なミッションの形式は、Albion が王子でないことを除けば、一応整うことになる。
10. このような男女の協調を描くフェミニズム童話としては、男性作家によって書かれた本作に限らず、Angela Carter, “The Donkey Prince” (1970) などの女性作家による作品もある。

参考文献

- Cambridge Dictionary* <https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/handsome> 2021年2月1日参照。
- Carter, Angela (2012). “The Donkey Prince”, Jack Zipes (ed.), *Don't Bet on the Prince: Contemporary Feminist Fairy Tales in North America and England*, Routledge.
- Cinderella* (2015) Directed by Kenneth Branagh, Screenplay by Chris Weitz, Walt Disney Pictures.
- Cole, Babette (1997) *Princess Smartypants*, Puffin Books.
- Coles, Diana (1983) *The Clever Princess*, Illus. Ros Asquith, Sheba Feminist Publishers.
- Lurie, Alison (ed.) (2002) *The Oxford Book of Modern Fairy Tales*, Oxford University Press.
- Williams, Jay (2000) *Petronella*, Illus. Margaret Organ-Kean, Moon Mountain.
- _____ (2012) “Petronella”, Jack Zipes (ed.), *Don't Bet on the Prince: Contemporary Feminist Fairy Tales in North America and England*, Routledge.
- Wilson, Jacqueline (2018) “Introduction”, Julia Bruce, *Ladybird Tales of Adventurous Girls*, Lady Bird Books.
- Zipes, Jack (ed.) (2012) *Don't Bet on the Prince: Contemporary Feminist Fairy Tales in North America and England*, Routledge.
- 谷口秀子 (2000) 「おとぎ話のジェンダーとフェミニズム」、『言語文化論究』、No. 11、九州大学大学院言語文化研究院。
- _____ (2017) 「おとぎ話とフェミニズム童話」、大野寿子 (編) 『グリム童話と表象文化——モチーフ・ジェンダー・ステレオタイプ』、勉誠出版。
- 吉原令子 (2013) 『アメリカの第二波フェミニズム —— 一九六〇年代から現在まで』、ドメス出版。